

〔研究室紹介〕

食料環境政策学科「地域計画論研究室」 Regional Planning

市田 知子
Tomoko Ichida

食料環境政策学科(旧農業経済学科)の中にあつて、地域計画論研究室はまず社会学をベースにしているという点で特徴的です。社会学とは一言で言えば社会関係、つまり個人と個人の関係、社会と個人の関係の法則性を見いだそうとする学問です。大前提は「人間の行為には経済的な動機だけでなく、社会的な動機や意味がある」ということです。人はなぜ一生懸命働くのか(あるいは働かないのか)、なぜ特定の宗教を信じるのか、なぜ高いブランドもののバッグを買いたがるのか、なぜ教師は教師らしく、学生は学生らしくふるまうのか、そもそも「らしく」とはどういうことなのか等々、社会学は当たり前とみなされたり、その個人の特質として片付けられたりする人間の行為の社会的な意味をあえて探求します。

もう一つの特徴は、都市、農村、郊外それぞれの地域社会がかかえている様々な問題を現地調査から学び、自分たちで解決策を考えていくことです。もっとも当学科の研究室はいずれも農村調査実習を必修にしていますので、さらに特徴を挙げるとすれば、ここ2年ほどお世話になっている栃木県芳賀郡茂木町での集落点検ワークショップと、集落の方々と協力して行う生明祭での農産物直売があります。

ワークショップというのは、まちづくりやむらづくりに際して住民の人たちが自ら問題を発見し、解決手段を考え、実行していくという一連の過程を円滑に進めるために生み出された手法です。地域社会の合意形成を行う上でも、これまで役場や公共事業にお任せだったスタイルを改める上でも注目されています。

2008年8月に茂木町で行った集落点検ワークショップでは、13名のゼミ生が4班に分かれ、集落の方



写真1

々と一緒に現地を歩いて回りました(写真1)。かつては葉たばこやこんにゃくの生産が盛んでしたが、輸入と価格暴落により衰退し、コメの減反が追い打ちをかけて農業だけでは食べていけなくなってしまったという典型的な中山間地域集落です。4班それぞれ、年々、増え続ける耕作放棄地をどう活用すればよいかという課題に取り組みました。地元の人たちには「若いんだから自由な発想をしてほしい」と期待されましたが、なかなか苦労しました。アケビ、いなかふえ(地元の野菜や果物を使ったカフェ)、蛭米(コメのブランド化)、鰻や鯉の養殖など、大胆なアイデアを模造紙にイラスト入りで示し、集落や役場の方々の前で披露しました(写真2,3)。

このように耕作放棄地一つをとっても、鬱蒼とした竹藪や葛藤の絡まる様子を目の当たりにすることによって、さらに現地の人たちから直に話を聴くことによって「何とかしなければ」という気持ちになります。

また、生明祭での農産物直売を通じて、学園祭かつ生田キャンパス周辺という限定つきではありますが、



写真2



写真4

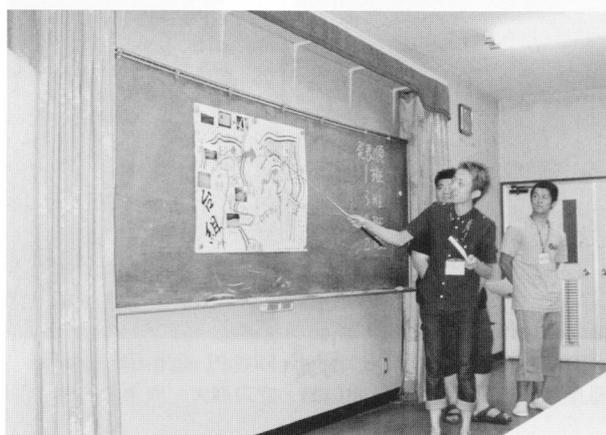


写真3

都会でも葉がついた大根やカットしていない白菜の需要が意外にあることがわかりました。2009年11月の生明祭では、Marché Ichida と銘打ってオシャレな店構えにし、茂木直送の野菜や柚を完売しました (写真4)。

私自身は前任の教授から研究室を引き継いで4年目ですので、卒業生はまだ2回しか送り出していませんが、以下に挙げる卒業論文のテーマから「社会

学」、「現地調査から学ぶ」という二つの特徴が多少なりともおわかりいただけるのではないかと思います。

「都市農業の展開過程—横浜市を事例として—」、「商店街と大型ショッピングセンターの共生」、「精神障害者と農業について—練馬区を事例として—」、「郊外論についての考察—多摩ニュータウン住民の視点から—」、「若者ファッションの考現学的考察」

2010年4月より、研究室の看板は「環境社会学研究室」となります。これまでの研究内容に加え、農業や農地のもつ多面的機能、たとえば景観、保養、生物多様性に焦点を当て、より多くの人々が農業や農村に興味や問題意識をもち、実際に関わるようになるにはどうすればよいか、また、いままでなぜそれが充分できてこなかったのかを、私自身がフィールドとするEUやドイツの実態と比べながら考えていきたいと思っています。

より詳しくはHP：<http://www7a.biglobe.ne.jp/~chiikikeikaku/>をご覧ください。幸いです。